

雪印種苗(株)苫小牧工場の歴史

飼料生産部 苫小牧工場 松田 昌樹

日頃より弊社苫小牧工場の配合飼料をご愛顧いただき、心より厚く御礼申し上げます。

苫小牧工場は1986（昭和61）年に操業を開始しました。全道の酪農家ならびに畜産農家の皆様のご支援に支えられ、今年で35年目を迎えることになりました。

●江別飼料工場の開所

1952（昭和27）年、乳牛用配合飼料を主体とした江別飼料工場が操業を開始しました。弊社第一号の配合飼料工場の誕生です。江別飼料工場は種子精選工場（土地面積約500平方メートル）として使っていた木造の建屋を改築したもので、配合飼料の月産能力は375トンでした。

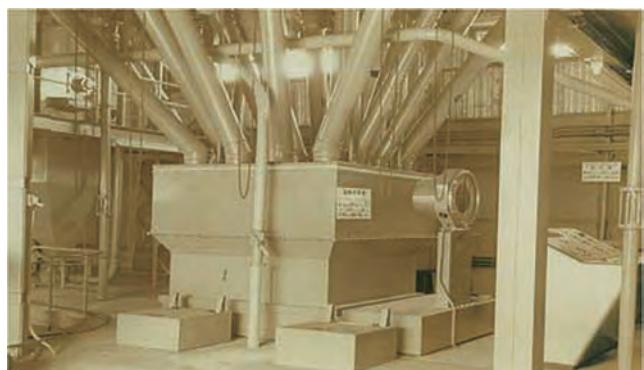


写真：弊社第一号配合飼料工場

当時の製造は手作業が多く、製品形態はほとんどがマッシュ（粉）タイプでした。その後、需要の増加に伴い製造能力の増強を目的として、1962（昭和37）年に大改修工事を行いました。建屋は鉄筋構造となり、さらにスイスビューラー社製の製造機械を導入して当時最新鋭の配合飼料工場へと生まれ変わりました。制御システムによる自動化が進み、粉碎と配合の機械設備を増強しました。



写真：木造から鉄筋へと近代化した新工場



写真：大型計量設備

1976（昭和51）年、トウモロコシなどの穀類を加熱圧扁する装置（現在のフレーク加工設備）を導入し、フレークを配合した飼料の製造を開始しました。牛用飼料として、栄養成分の利用効率向上に着目した製品を販売する時代となったのです。

●江別飼料工場の閉鎖

江別飼料工場の製品を供給する地域は、時間の経過とともに変化しました。工場周辺地域は宅地化が進みました。配合飼料の販売量が増加し、さらに製造能力の高い、効率的で大規模な工場が必要となりました。手狭となった工場には、次のような問題が生じていました。

- ① ペレット加工など新たな設備を増設するスペースがない。
- ② 原料をダンプで受け入れすることができない。
- ③ 製品倉庫、製品タンクの増設が困難である。
- ④ 工場周辺は住宅地域であり、工場の出入口と鉄道（JR）および通学路が交錯して危険である。
- ⑤ 車両と構内作業の動線が交錯しており危険である。

このような状況を解消するために、新工場の移転先を苫小牧市と選定し、1983（昭和58）年に建設用地を購入し、翌年より苫小牧工場の建設を開始しました。

●苫小牧工場立地概況

工場用地は、苫小牧西港臨海工業地帯の食品・飼料団地のために造成された公共埠頭の背後に位置しています。港、高速道路、鉄道（JR）で道内主要都市と結ばれ、原料と製品の効率的な輸送に適していました。食品・飼料団地として十分な広さ、電力・用水の確保、住宅地との距離などの心配がなく、新工場の最適地として選定したのです。この時建設用地の近隣では、既に現在のホクレンくみあい飼料（株）苫小牧工場、新北海道飼料（株）、MFフィード（株）が操業していました。

●苫小牧工場の建設

1983（昭和58）年12月に社内で建設委員会が発足し、1984（昭和59）年12月に工事を着工しました。



写真：建設中の苫小牧工場①

設計管理は（株）岡田設計、建築工事は（株）松村組、機械装置・電気工事は（株）アムセックが担当して行い、翌年12月に無事完成しました。



写真：建設中の苫小牧工場②

工場と事務所を合わせた延床面積は約6,000平方メートル、月産定時製造能力は5,000トンです。製造システムは集中制御方式を採用、フレークとペレットの加工設備を持ち、従来よりも製品の品質と製造効率を高めた工場が誕生しました。



写真：完成した苫小牧工場

●苫小牧工場の落成と操業開始

苫小牧工場での試験製造が順調に終わり、安定した稼働が確認できたことから、1986（昭和61）年2月末日に江別飼料工場を閉鎖し、同年3月より苫小牧工場の本格操業を開始しました。そして、落成式を同年4月に行いました。



写真：苫小牧工場全景（西側より）

○次号へ続く。